

杉河内の民俗

一 概 観

染 矢 多 喜 男

杉河内（スギノカワチ）部落は、五万分の一地形図の「森」図幅で、久大線杉河内駅の東方にある慈恩滝より上った台地上にある。部落の中心を北流する川によって玖珠郡玖珠町と日田郡天ヶ瀬町とに分属している。旧藩時代は共に日田代官所支配の天領であつた。玖珠町の杉河内は花香の庄屋支配下に渡辺家が組頭を勤めた。現在は四八戸で、杉河内二四戸・早水二四戸の二組に分かれている。渡辺・梅木姓が多い。天ヶ瀬町の杉河内は赤岩の庄屋支配下に河野家が弁指を勤めたが廃絶した。現在は四〇戸で、穴森八戸・下河内一八戸・土穴一四戸の三組に分かれている。河野・小野・梶原姓が多い。両部落は明治四〇年の大火によって、周囲の山林と部落の大半である五三戸が焼失した。農主林副ともいうべき山村で、一戸当り平均水田面積は五反に満たず、山林は二〇町近く持っている家もあるが、僅かしか持たない家が多い。専業農家は少なく、土木工事などの兼業農家が多い。両部落とも伊勢神宮（遙拝所と通称）を鎮守としているが、天ヶ瀬側は旧五馬村の五馬媛を祀る金凝神社の、玖珠側は旧北山田村の滝神社の氏子であつた。檀那寺は両部落とも玖珠町の真宗寺院である。言葉のアクセントにはやゝ違いが見られ、天ヶ瀬側は日田の、玖珠側は玖珠の影響下にあるという。小学校は玖珠町側にあり、天ヶ瀬側は委託という形で分校に通学させている。

二年中行事

正月

〔正月の支度〕 ススハライは師走の一〇日前後頃からする。二五日頃、正月ガイモン（買物）に平川（旧北山田村）まで駄をひいて行った。米を積んで行くこともあったが、お医者にワリキ（薪）や野菜をお歳暮として持って行き、薬価を払った。普段は辛抱しても正月は明るくせねばといつて、大きい方のランプを使うので、灯火用のセキタン（石油）・黒砂糖・酒・魚など正月用品を買った。着物は盆・正月の前に反物売りが来ていた。餅搗きは二七、二八日頃にする。丑の日は火が激しいのでカマドが荒れるといつて搗かない。餅搗きの時にちぎった生餅に餡をまめしてテスクメを作る。トシトリともいう。餅搗きの有無を「年取りましたか。」と訊ねる。オセイボクバリはおしせまつてから子供に行かせる。

〔トシノパン〕 鏡餅は大黒様・床の間・神棚・仏壇・荒神様・モンジン（文珠）様・マヤにホコータ。一番大きいのは大黒様ので、土蔵に角の斗櫛を口を手前にして立て、全部の櫛を次々に斗櫛の中に入れる。上に白紙を敷いて前に垂らす。その上に餅を三段に重ねて蜜柑を置く。裏白を敷く家もある。モンジン様のは机の上に供える。玄関口にイグイを打って松竹梅を結びつける。神棚にも松竹梅を上げる。米飯や小豆飯は、正月早々に飯を炊くようではいけない、翌年に持越さねばならぬといつてたっぷり炊く。正月に冷飯をフルコク（古穀）といつて喜んだ。数の子・メザシ・センコーブ（線昆布）・昆布・キンピラ・乾鱈などで御馳走をした。塩鯛を買えるのは分限者だけであつた。

ネング（小作料）は年末に納める。地主はねぎらつて酒のカクウチをやらせたり、燗をしたり、各自の好みに応じて、できあいのサカナで酒を振舞つた。貸借の整理はシャツテモツテトシノパンにする者が多く、多い家は徹夜していた。その年中に不幸があつた家に「お淋しいトシコシでありましょう。」といつて悔みに行った。

〔元日〕 夜のヒキアケ頃若水を汲む。汲むのは婆さんで、飲料水にしていた水路の水を汲み、神に供えてからわかつて茶を飲む。歯固めといつて干柿を食べる。氏神様に詣る。氏神様は嶮しい所にあるので達者な人が代表して詣る。朝食はゴ

ハンや焼いた餅を食べる。訪問は遠慮し合う。兩戸は全部を開けない方がよいと一枚くらい開けた。ザ（座敷）も掃かない。土蔵も開けない方がよいというが、閉め切っておくと鼠が餅や蜜柑をとるので開ける。

〔二日〕 ワラウチをする。競争で朝早くから藁を打ち、アシナカ・繩・牛馬の道具（マガのヒキオ・ヒキヅナ・スキのミヅナワ・シリガイ・ハラオビ・ムナゲー・ニナワ）などを作る。昔は伍長（部落長）の家に手拭を二スジ持って年始に行くとき、オゼンを出して御馳走してくれた。その後アイネンシにかわった。

〔四日〕 ハツヤマ。巽に向って唱え言をいって挨拶していたが、いつだったかはつきりしない。

〔七日〕 七草ブースイ（雑炊）。センコーブなど何かか七種類を入れて雑炊を炊いた。

〔一日〕 帳祝い。帳面を新調してオミキをあげる。オカガミピラキで焼雑煮をする。小豆を煮て、醤油と鰹節で味をつけ、焼餅を入れる。餅は固かった。

〔一四日〕 モグラウチ。子供達が二米くらいの篠竹の尖端に藁束をゆわえ、一軒ずつ軒下で「モグラウチは一四日、小豆飯は一五日。」と囃しながら打つ。貰った餅を袋に入れ、田圃の中で火を焚き、焼いて食べる。晩は福俵がある。ワカイシが小さな俵を作り、五米くらいの細引をつける。頬冠りして二三人が組み、投げ込んで「アキの方より来た福俵。ドッサリ祝うておくれ。」とつくり声で囃し、米・鏡餅・銭などを貰った。交代で袋持ちをした。投げ込んだ福俵は取られないようにした。家の人は取ろうとして襖の陰などに隠れて待機し、間髪を入れず福俵を押えようとした。取られると家を廻れなくなるが、五〇銭銀貨で祝ってくれた。

〔一五日〕 粥ダメシ。小豆飯に餅を入れて炊く。雑煮飯ともいう。炊く時に一四日の晩に作っておいた、一寸二分くらいの長さの篠竹の管を入れる。管は片面をそいで、家族・農作物・牛馬などの名前を墨で書いておく。炊きあがると主婦が管をとり出して鉢に入れる。雑煮飯は神仏に供える。食後庖丁で管を割る。最も多く米粒の入っているものを一〇として、入っている割合を家族で評価し、運不運・豊凶をうらなう。戦時中に廃れた。昼はモグラウチの棒などの材料を持ち寄ってドンド焼

きをする。モグラウチでかせいだ餅を焼いて食べる。この時に篠竹で作った牛を追う鞭をふすべると牛がいたまないと
一五日頃までに正月歩きをした。紙一帖(三〇枚)とテヌグイを持って行った。当時は中川駅付近で紙を漉いていた。昔は
月の一、一五日は集会などがあり、忙しい日であった。

(一六日) ヤマンカミサママツリ。山に關係深い人達は宴会をしていた。昔はヒカリが多かった。マンパチワリ(費用の
平等分担)ともいった。

(二〇日) ハツカコーガシまたはハッテンコーといって、柿の皮と麦を煎って粉を作り、砂糖を入れて食べた。二十日正
月で正月がおしまいであるから、これから先は客が来ても餅を出さなくても失礼にならなかった。

春から夏

(二月二日) 暇取り。オトコシ(下男)やおナゴシ(下女)はこの日に暇を取る。年ぎめは五円くらい、前借ではよく勤
めればキモン(着物)を一反贈った。傭主が食事は持つが、作業衣は持つとは限らなかった。イリコミは一週間後で、それま
でに傭う方は洗濯などして受入れの準備をした。

(初午) 組單位に稲荷様を祭り、小豆飯を炊いて酒を飲んだ。子供達は奉納正一位大明神とか源九郎稲荷大明神などと書い
た幟を作り、稲荷堂の前に立てる。字をよく覚えるといった。

(彼岸) 彼岸入りに米の粉で丸や平たい彼岸団子を作る。「ハヨーホカワンと彼岸がホツルゝぞ。」といって、仏壇に供
えた。

(社日様) ヨコーて氏神様にオミキを上げた。

(雛節供) 白やフツ(蓬)の菱餅を作って雛に供え、白酒を飲んで祝った。雛は焼物からオキアゲ(押絵)に変わった。掛
軸のもあった。オキアゲは竹の足を差した。内裏雛は嫁の里から長女の時に贈られた。その他の親戚が官女や狂言物などを贈
ってくれた。重箱に餅餅を一々二段詰め、その上に菱餅を載せてお返しした。

〔お接待〕 大帥講の人々がボンモリを接待した。キデシヨ（木皿）に小豆飯と昆蕪・芋・牛蒡・豆・ニージン（人蔘）の煮付けや饅頭を盛り合せたものである。

〔野畑割り〕 共有原野を焼畑耕作していた頃は、戸主が出席して、原野使用料の決算会であった。現在は部落総会となり、役員選挙や決算などを行っている。三月二四日に行なう。

〔四月八日〕 お堂に桶を置き、中に小さなお釈迦様を安置して、花で堂を作る。オサイセンをホコーで、甘茶をかけてよばれた。賑ったので、古着屋や羊かん・饅頭売りが平川から来ていた。

〔五月節供〕 菖蒲・フツを各部屋の上り口の軒先三ヶ所に差す。長男の場合は嫁の里から旗幟を贈ってくれる。後には鯉幟になった。粽ダゴや柏餅を作る。オコワを蒸してチモトマキなどで御馳走をした。嫁の親元には粽ダゴとオコワを贈る。

〔エツスエ〕 三月四日と五月六日にエツスエといって、老人達が灸をすえていた。この日にすえると後がいたまぬという。
 〔牛馬ツクロイ〕 農繁期後に、ハクラクが来て、足・背中のツボに大きな鍼をさして血を出したり、焼火箸を足のニギリ（足首）や口にあてて牛馬のツクロイをした。口にあてる時はハナネジをかけた。削った爪は雞にくわせた。ツクロイオミキをあげた。

〔半夏〕 「半夏の日に生梅を食べると頭が禿げる。」といった。別に行事はなかった。

〔土用〕 土用ゲーといって鰻や雞を食べた。タニシやコヒナ（川にな）を拾いに行き、妻楊子でぬいて食べた。

〔六月一日〕 ヤクジンバライ。鎮守で神官が祝詞をあげてお祓いをする。

〔六月一日〕 オンバライ。厄病除けの注連繩を部落の入口に張る。鎮守に詣ってオミキをあげる。

〔七夕〕 六日の夕方に父親が笹を伐ってくる。笹に短冊・大幡・紙人形・テマル（手毬）などの手芸品を子供がつける。短冊には歌（百人一首）や七夕様・天の川などの文字や「美人天より落ちる。」などの文句を書いた。朝日の上らないうちにイモガラ露の露を予め集めておいて墨をする。紙人形は紙を丸めた首に、色紙を折った衣裳を着せたものである。テマルは糸を巻いて作る。笹は床の間に立て、七夕饅頭を供えて参る。七日の早朝に泉水や川などの水端に立てる。水鏡に月や星が写らねばいけないという。笹は川に流さずいつまでも立て、おく。七夕饅頭は小麦粉に曹達を入れ、小豆のつぶし餡を入れたふくらし饅頭である。

七日には前日伐ってきた竹を物干竿にしたり、花筒や線香筒を作る。七日の物干竿はうらからさしても、おもてからさしても差支えないという。牛馬を川に連れて行き、木瓜の蔓で洗ってやる。仏具を灰で磨く。墓掃除に行く。墓は土葬であり、盆以外には殆んど墓参もしないので、雑草がおい繁って判別できないから、墓掃除は自家の墓に詳しい人が行く。初盆参りは七日を過ぎれば各自都合のよい時に行く。灯籠・灯籠台・線香・仏飯（米）・素麺・駄などを持って行く。

〔一三日〕 河野家の本家は精霊迎えに行くが、分家は迎えずに送るだけである。玳珠側には迎えるが送らない所もあるという。迎える日が沈んでから子供達が墓地まで提灯をつけて行く。墓に水・線香・花を供え、灯籠を立てた。水・線香だけの家もある。水は墓石にかけ、茶碗に入れる。老人達は「迎えに来たわな。さー一緒に行こーな。」と墓に声を掛けて迎えた。

〔一五日〕 日没頃送りに行く。提灯・花・線香と徳利や竹筒に入れて水を持って行く。水は墓石にかけたり、花筒や茶碗に入れる。線香・灯籠に火をつける。

〔盆踊〕 一三〜一四日に初盆の家で供養踊をする。家のツボの真中にトコエン（涼み台）を置き、杭を打ってカラカサを立て、大灯籠を一つ下げる。駄桶の上に太鼓をはめる。午後八時頃から踊り始める。モクレン尊者から始める。サエモン・コヤオコシ・ヨイトナ・ヨイヤナ・センボンヅキ・ダンシチ・マツカセなどを踊った。マツカセは大正頃入って来た。口説は八

百屋お七・付根崎心中・中野心中など心中物が多かった。ワカインは盆の一月前頃からノミダナに合宿して、口説本をバカイオーで覚え、朝草刈りに行く時牛の背で暗誦したりしていた。年寄はザに上ってドブなどを飲んで過した。口説にはテヌグイ一本、踊には閉扇一本が贈られた。一七日は観音様で、滝の観音を迎えてきて、小学校の校庭で盆踊があった。隣接部落からもワカインが踊りにきて賑わった。二一日のお大師様にも踊があった。二四日のお地藏様が最後の盆踊であった。

秋から冬

〔八朔〕 竹で筒を作り、ミゾクチに立て、田の神にオミキをホコー。

〔ミギニチサマ〕 芋名月（八月一五日）にはトイモをふかす。屋外のわかりにくい所に盆に入れて供える。子供達が「上げたか、下げたか。」と聞くので、「上げたよ。」と答えると、子供達は捜し廻った。豆名月（九月二三日）には枝豆・粟・トイモロコシをユガイで供える。芋名月と同じ要領である。

〔九月九日〕 クリグニチといつて栗飯を炊く。

〔亥の子〕 亥の子餅を搗いて近所に配る。この日から縄がいなくなるという。

〔鎌上げ〕 ゴツオ（御馳走）をするくらいである。雑の塩気御飯を炊く。

〔ホガケ〕 上の高原は今草地になっているが、昔は開墾して桐を植え、間に粟・大豆・蕎麦などの雑穀を栽培し作業量が大きかったので、オトコシ・オンナシを使う家がかなりあった。そんな家では新米がとれると、ホガケといつて新米で小豆飯や芋御飯を炊き、塩鰯・塩鯖・干鱈・オバイケなどで祝った。田圃にヨナベ小屋を作り、この日から新穀で糺工を始める。俵・縄・アシナカなどを作る。

〔冬至〕 南瓜を食べた。

三 人生儀礼

出産

〔帯祝い〕 五ヶ月目の戌の日に帯祝いをする。八尺の白木綿と酒を嫁の母親が持つてくる。隣近所の女を招んでお茶をする。祝事だから酒を出す。ゴチソウモウケは親がする。取上げ婆さんは真近かになって何日かもんで貰う程度である。「妊婦は四っ足を食べてはいけない。」・「兎を食べるとイグチの子ができる。」・「火事を見るとホクロができる。」といった。安産祈禱は森のゲンコー院に行った。帰途最初に女に逢えば女児、男に逢えば男児が生まれるとうらなっていた。

〔出産〕 お産は納戸でする。畳を一枚あげてモীগを下に敷き勾配をつける。畳の上に莫座やぼろを敷く。金神の方を向いて生むと眼が悪くなるという。曆をみて明き方を選ぶ。産婦は勾配をつけた畳によりかゝり、脚を立て、開いて生む。取上げ婆さんはお腹を押してやる。出産の時に夫が家に居ると癖になるというが、家に居て後から抱いた人も居る。カマドの上に牛の鞍を置くと産が軽いという。青竹をシャグほどの力がなければ子を生めないという。へその緒は鉄で切る。紙に包み名前を書いて筒に入れておく。筋がついた時にセゼて飲ませるとなるといふ。後産は小鹿田焼の土瓶に入れて、人によく踏まれる所がよいという。便所道の軒下に埋めたり、納戸の床下に放置しておく。塩を入れるととけてしまう。産湯は盥で使わせ、床下に捨てる。

〔ウブメシ〕 ウブメシは皿に盛り、卵くらいの石をのせ、床の間や子供の枕元に置いてウブの神にホコー。石の形がよければ頭の形もよくなるという。米飯を炊いて招客する。ウブメシクイという。産婦はヒがあくまでの赤不浄の間は、魚・椎茸ケイ（雞）など栄養のある物を食べてはいけない。魚を食べるとサカダチが悪いという。コウミダンゴやイモガラツユを食べさせる。

〔ミツメ祝い〕 日はきまっていないがミツメ祝いに名付けをする。ナボン（名本）を見てつける。学のある人につけて貰うこともある。仲立・嫁の親・近親者・取上げ婆さんなどを招く。小豆飯を炊き、小魚の頭付き・昆布・人蔘などを煮付け、

盛りつけのヒラゴシラエをする。仲立は御祝儀、嫁の親は餅・酒・晴着一重ね（肌着・着物・袖無）、近親者はお餅を重箱に二段贈る。産婦はミツメ祝いが済めばおしめくらしいは洗ってもよい。

〔宮詣〕 宮詣は男児三〇日目、女児三三日目である。姑が抱いて行く。嫁の里から贈られた晴着を着せる。鎮守に詣るだけである。泣かせる方がよいというが泣かせない。

〔初正月〕 長男は破魔弓、長女は羽子板を嫁の里から贈ってくる。破魔弓は板にオキアゲで、弓矢がつけてある。長押にうつ。そのまゝ一生飾っておくか、神棚にしまう。羽子板もオキアゲである。

〔初誕生〕 餅を搗く。神に供える一升五合餅を子供に背負わせて神の方へ歩かせる。歩く子はサカダチがよすぎるといつて突き倒す。近親者にも一重ねの一升五合餅を配る。招客はしない。

〔ヒモトキ〕 三才の一一月一五日にヒモトキ祝いをする。嫁の里から酒一升と餅をエジュウ（四段重ねの重箱）に入れ、男児なら紋付、女児は振袖を贈ってくる。長男・長女の時だけである。招客してお膳をする。金竈神社に詣る。五才、七才は祝わない。

〔厄祝い〕 男四二才・女三三才を厄年という。厄年に不幸があれば厄負けをしたというが、特に厄払いはしない。四二才の二つ子があれば悪いといふ、他家に捨てる。酒一升を持って貰いに行く。拾った家は着物をこしらえて子を返す。

〔還歴〕 赤子にかえるといふ、赤い肌襦袢や赤ベコを作つて祝つてくれる。

婚姻

〔通婚圏・適齢〕 隣接町村からが多く、川の上流地区からの嫁が多い。男は二二才・二三才、女は一九才・二〇才くらいが適齢であった。

〔嫁女見〕 仲立人がベベンコミとかマヤミとかいって、本人を連れて娘とその家庭を見に行く。娘に茶を汲ませる家もあった。

〔嫁女貰い〕 娘方の適任者を捜して仲立人になって貰う。両方の仲立人が嫁女貰いに行く。酒一升と魚（頭付か雞）を持って行く。たいがい考えさせてくれと即答は避けるのが普通である。持って行ったものに手を付ければ派がある。よいという事になれば、貰い受けの条件などについて相手方の仲立人を通じて折衝する。

〔ヒニチギワメ〕 両方の仲立人と親が酒一升と雞を持って行く。酒は一升では足らぬことが多い。シューギギモンとして、紋付・ミチギ・シタギ・オビ・式服・ウチカケや傘・履物などのどれほどを贈るか、マカナイの日時や人数などを打合せする。

〔結納納め〕 祝言より一週間前頃に仲立人が行く。のし・シューギギモンと家族全員へ適当なおみやげを持って行く。

〔カネツケ〕 祝言の前夜、嫁の親友や近所の婦女子を招いてお別れの会をする。カネツケという。

〔タンスカキ〕 嫁入道具は長持・簞笥・蒲団・鏡台・盥・針箱などで、大工を備って作る。祝言の日に一足先きにタンスカキ（荷取り）に行く。人を備うか近親者が四人、紅白の鉢巻をして、二棹の荷物を担いで帰る。

〔婿入り〕 祝言の当日、仲立人・婿・ムコマガラカシ・オジなどが嫁の家に行く。婿入りという。ムコマガラカシは婿の従兄弟などの婿と同年輩の者である。柳樽（三升入りの角樽）・懸鯛・蝶飾りをした箱入りの茶を持って行く。先方で膳が出る。婿はいつ帰ったともなく早目に帰る。婿逃げという。嫁の部落の青年にタルをする。三升樽を贈る。婿入りをしないこともある。

〔嫁入り〕 嫁は家の仏壇を拝み、両親に挨拶して、表戸口からアトスザリで出る。夜一〇時頃出発する。嫁方は仲立人・父親・兄弟（配偶者があれば配偶者も）・オジ・オバ・アリツケオナゴなどで、婿方の倍くらいの人数である。提灯をたくさん運んで歩いて行く。

〔ナカヤド〕 婿の家より手前にあるナカヤドで、準備ができたという知らせがくるまで休憩する。

〔祝言〕 婿の家に着くと、オテヒキが一升枓を持って出て案内する。嫁はテノゴイ（手拭）を与える。ゴゼンから上り、座敷の定められた場所に座る。

夫婦盃・親子盃・兄弟盃の順にする。婿・嫁・仲立人・婿の両親・ミトドケニン・謡い手が参列する。ミトドケニンは嫁側の親族代表である。男蝶・女蝶は両親の揃った末子になる。小学校一年くらいであるから、仲立人が指示をする。謡曲の上手な人が謡い手になり、「所は高砂」・「四海波静か」・「長生」の三番を謡う。

〔本座〕 披露宴は前座と本座がある。前座は婿方の遠縁や部落の世話になった人を招客する。本座はまずオチツキゾーニを食べる。次に冷酒がでる。正客だけが三段組の盃で冷酒をいただく。他は順盃である。終れば盃を床の間に納める。冷酒の時に、三々九度の時と同じ三番の謡曲をショーバンニンが謡う。ショーバンニンは父親か父親の代理である。嫁は三回くらい色直しをする。吸物は蛤・魚・蒲鉾など数回出る。床の間に、器用な人が作ったシマダイ（高砂の尉・媼）を飾っておく。葱に目鼻を書いて着物を着せて作る。

〔ヨメゴチャ〕 本座が終れば、嫁が全員にお茶を出す。姑が入れたお茶を畳のへりを踏まないように作法正しくお茶を出すので、大変重荷であった。今は主だった人にだけ出す。

〔ワラジ〕 嫁方を途中まで追いかけて行き、ワラジを飲ませる。茶碗に一升徳利から注ぐ。

〔ヨメゴマワリ〕 翌日、姑が連れて隣近所に挨拶廻りをする。氏神に詣る。ヨメゴマワリという。

〔ミシリアイ〕 隣近所の主婦を招いて祝宴をする。ミシリアイという。

〔タルギヤク〕 翌日の晩、招客されなかった人達が話し合ってお喜びに行く。タルギヤクという。樽料を持って行く。夫婦の床入りはタルギヤクが終ってからになる。

〔ミツメアルキ〕 三日目に、新夫婦が婿の両親と嫁の里に行く。アリツケオナゴも一緒に帰る。仲立人に餅（一段）・酒一升、里に餅一組（四段）・酒二升を持って行く。嫁の里では御馳走をして歓迎する。新夫婦が泊るのは縁起が悪いといつて日帰りする。

〔初正月〕 年末には歳暮として塩鱒を嫁の里へ贈る。正月に一重ね（一斗）の餅を持って行く。ヨメゴカガミという。搗き

立ての餅を型に入れて、イキの抜けないように蓋をし、搗いては入れて作る。嫁の里ではこれを切餅にし、祝儀の水引をかけて部落内に配る。仲立人には酒とみやげものを持って行く。

〔麦ウラシ〕 麦の収穫頃、嫁の里に夫婦で加勢に行く。麦ウラシという。品物を贈ることもある。手の悪い時（農繁期）には加勢に行く。

葬送

〔ヨミチガエ〕 達者な人が頓死した時には、棟の辻に上って、死者の名を何回も大声で呼ぶ。ヨミチガエという。

〔枕直し〕 死体を納戸から座敷に移し、北枕に寝せ、顔に手拭を掛ける。六間屏風は倒れないように縄でくびる。蒲団の上に鎌を置く。枕元に線香一本・花一本・オヒカリを上げる。身近い人が付添う。

〔ハヤオブク〕 ハヤオブクは米を一握りアグルシコ炊く。残らないように盛る。湯灌後に棺に入れる。

〔講中〕 一〇戸余りで講中を作っている。死亡があると直に講中に知らせる。講中の人は野菜・米一升・コロザシ（時の相場で銭）を持ち寄る。向き向きによって、知らせに行く係や、イケホリ・ノベゴシラエ・ナイシヨカタなどを分担する。知らせに行く係は親類・寺・役場・医者などに行く。死亡の通知は必ず二人で行く。知らせをうけた家は御飯を炊いて出す。食べないと、知らせに行つた者がマクルといって必ず食べる。イケホリは三〜四人で、山行きの服装で墓穴を掘りに行く。終れば穴に棹をわたして、鍬をかけて帰る。イケホリオミキが出る。ノベゴシラエは六道一六本・線香灯籠一對・ろうそく灯籠一對・シカバナ・菊の花・蓮の花・シモン・ウーテ（炬火）を準備する。死人が子供であれば、棺に南無阿弥陀仏と書いた念仏紙を貼る。

〔ヨトギ〕 講中は一時頃まで、その後は親族のみがヨトギをする。線香を絶やさぬように誰かがおきている。友引の時はフタヨサ（二晩）になるので、前の晩に講中、次の晩に親族がする。講中はヨトギマイ五合を持ち寄る。野菜の煮付けが出る。オミキを出す家もある。

〔湯灌〕 湯灌は日がかげってから、あいまをみてする。親・兄弟・子供など身近な人がする。ユカンザケを飲む。畳をあげて莫座を敷く。

〔納棺〕 三角の布を冠せて顔に垂らし、白無垢を裏返し左胸に着せる。白無垢は身近い人が一針ずつ縫う。糸は端を結ばない。手を胸で合掌させ、珠数をかけ膝を曲げた姿勢で足袋を履かせ、内棺に納める。内棺は縦三尺五寸・横二尺の箱である。ハヤオブクを抱かせる。死者が小児であれば菓子や玩具を、酒好きなら酒を棺に入れる。お寺さんが内棺の蓋をとって死顔を見て、マクラガエシの読経をしてから棺に入れる。棺は四角のスワリ棺である。昔はミコシ棺も作っていた。ミコシ屋根の中央に鳳凰、四隅に燕をつけたものである。

〔葬式〕 葬式は普通は死んだ翌日であるが、友引や身近い親戚が遠方であれば三日目になることもある。座敷にするが狭ければツボとする。座敷の棺を安置した場所に莫座を敷いて棺を置く。棺の四方から線香灯籠・ろうそく灯籠・六道を立てかける。シカバナ・蓮花・ノベダゴ（オゲソクに盛る）や果物・野菜を供える。ツボの四方にシモンを立てる。僧侶の読経とシューコー（焼香）をする。終れば親族代表が挨拶する。

〔出棺〕 長病人でゴガンホドキもできないで死んだ場合は米と塩を棺に振りかける。棺は身近い人が担ぐ。長男は必ず後を担ぐ。長男ともう一人は白の三角巾をつける。シモンの中、西・北門をならべてくぐる。

〔野辺送り〕 ウーテ・六道・ろうそく灯籠・線香灯籠・シカバナ・蓮花・位牌・棺・ろうそく灯籠・線香灯籠・親族・講中の順で行く。ワカサレ（岐れ道）に六道を一本ずつ立てて行き、最後の人が集める。

〔埋葬〕 内棺につけてある綱を持って、身近い人が穴に西向きに棺を入れる。最も身近い人が穴に北向きにまたがって、前・左・右・後の順に一蹴ずつ土をかける。この時に足を踏み変えてはいけない。次に身近い人が一蹴ずつ五人くらいかける。棺の中央に六道を一本立て、それを目印にイケホリの人が土をかける。土饅頭ができると、藁で作ったオニガシラを逆様に六道にかぶせる。線香灯籠・ろうそく灯籠・六道をオニガシラの上によせかける。ウーテを二つに分けて、二人が正面から左右

に別れて墓を廻る。オニガシラが燃え出す。反対側で六道によせて焼く。死人の屋敷取りという。シカバナを一寸火に入れる。焼いてしまつてはいけない。位牌と一緒に墓の前に立てる。六道の燃え倒れた方向に次の死人が出るという。

〔ハカツキ〕翌朝ハカツキに行く。花・水・線香・ろうそく・石を持って行く。石は川床から拾ってくる。一度手にした石はとりかえてはいけない。六道を抜いて土饅頭の頂上に石を置く。イケホリに使つた鍬を持って帰る。帰途はアトムクものではない。家で手を洗い、塩を振りかけてもらう。お寺に礼参に行く。野菜・醬油・酒二升・オトキマイ一俵とココロザシ（家によって多少がある）を持って行く。お寺ではオトキを準備している。

〔タイヤ〕七日毎に身近い人が墓参りする。時期によって異なるが、ヒトナヌカかフタナヌカに、親族は餅を一〜二段とココロザシを持って忌中見舞に行く。僧侶をよんで読経する。餅を搗き菓子などを出し、貰つた餅はウツリとして返す。ヒキモノとして盆・重箱・陶器などに、忌中と死者の名前を書いて贈る。

四九日は餅四九を仏壇に供え、僧侶をよんで読経する。身近い親族だけが詣る。四九日で死者の魂は屋の棟を離れるという。〔初盆〕親族は米一升・灯籠（料）・線香・ろうそく・野菜・素麺などを持って詣る。忌中見舞の時と同じように膳立をし、ヒキモノを出す。膳立は椎茸・素麺・スアエ・ダゴ・スイモン（吸物）などの四つ組である。仏壇には西瓜などを供える。素麺はゴーゲに立てて垂らす。一五日には根のついたまゝの里芋を供える。

〔年忌〕年忌は一・三・七・一三・三三・五〇年である。一周忌には近い親戚を招いて読経をする。モトカタは膳組をし、ヒキツケとして菓子を贈る。ヒキツケには一周忌と死者名を書く。親戚は米一升・ココロザシ・衣替え一反を持って行く。

三年以後は僧侶に読経してもらつた程度である。墓石は一周忌に立てばシメがいい方で、三年以後が普通である。「五〇年忌にあつた人はフのよい人、悪い人」といふ、めつたにない。五〇年忌には衣替えを持ってお寺に詣り、読経してもらつた。

四 農業（稲作）

七八

〔耕耘〕 アラオコシは、しまいのよい人は寝て正月しても田は起こしておけといって、正月前に牛に曳かせてスキで起こす。スキは三枚ベラの長床であったが、昭和の初めに、一枚ベラで底にカネのある、短床の改良スキに変わった。スキは平川（旧北山田村）のスキ屋に買いに行った。

〔代掻き〕 畦ケズリは鍬である。風呂鍬が金鍬に変わったのは大正頃である。金鍬のさしこみは角であったが、戦争前後頃に丸に変わった。クロウチはミツマタを使う。昭和の初めに土離れがよく腰も痛まぬ、といって使うようになった。クレガエシはスキである。アラシロは八本歯のモーガを使う。麦田用の廻転モーガは昭和の初めに使うようになった。ナカズキはスキである。ホンシロはモーガである。

〔苗代〕 苗代田は水がかりと運搬に便利のよい田を選ぶ。播種の一週間前に、吠に入れて池や川に種を浸した方が芽出しが早い。播種は五月八〜一〇日頃である。スキでおこし、モーガで掻き、青草を手でおし込んで鍬でならす。種はイチエンゲ（一面）に播いていたが、明治三〇年頃役場の指導で、綱を引き四尺ゴシに一尺のトオリを立て、播くようになった。初めはやかましくいわれたので、道端通りでは指導のようにしても、ナイショでは綱を引くのは面倒だといって普及しなかった。

〔田植〕 田植の方法はイキナリウエー片綱法―心綱法（正条植）―並木植と変わった。心綱法は梓植ともい、田の口の方から大正末に入った。片綱法は八寸毎に赤い布の目印のついたシヨロ（棕櫚）の親綱を引いて植えた。正条植は五間の竹に二株（一尺六寸）毎に一尺六寸の割竹をさした枠を使う。割竹の真中に小さな竹杭がさしてある。枠の縦・横の目印で後スザリしながら植えて行く。作業の遅速があるため、後スザル時に枠の竹が遅い人の脛にあたって、コトンコトン音がした。早い人が長い間隔をとって遅速を調節した。並木植になったのは昭和三〇年頃からである。横綱を引いて五寸位の距離・間隔を目測しながら植えた。田植は気の向いた人とチェマゲー（手間替え）した。セマチにに応じて人数は違うが、普通七〜八人くらいである。

〔除草〕 草取りは手でしていたが、大正一〇年頃にガメに変わった。昭和初年にタウチクルマを使うようになった。タウチクルマは爪が五本の一つ車であったが、前後に車のある二つ車に変わった。一番と二番はタウチクルマを使い、アゲ草（三番）は這って手で取る。

〔田植ヨコイ〕 ウドンや雞のタキコミを作って、焼酌を飲むくらいである。

〔虫追い〕 虫がコマイラチは稲を竹で掃く。孔をあけた竹に石油を入れ、田の中に落して廻るか、石油を腕でシャクリかけた。

〔風除け〕 ハタケヤスミ（八月三日頃）に氏神様で神官にお祓をあげてもらって、カザドメの祈願をする。

〔兩乞〕 七〇年前頃、藁で大蛇を作り、村中が慈恩の滝に行き、淵を泳がせた後、大木の枝に大蛇の首をのせて祈願したことがあった。山浦中が万年山の茶屋場に行き、麦稈や松の枝を積み重ねて干把焚きをした。湯平の山下池に部落中で水貰いに行った。途中でヨコー（休む）と其処に雨が降るから、ヨコーではならぬとやかましくいわれた。

〔八朔〕 二〇糶くらいの篠竹二本を水口に立て、地神と水神にオミキをホコー。願成就のオガンホドキを氏神様とする。重箱を持って行き、オミキをホコーで、午後中宮ゴモリをしてオミキアゲをする。

〔稲刈り〕 鋸鎌を使うようになったのは昭和初年である。昔は田に直接乾すドンダボシであったが、千歯のとおりがよいといつて、大正末頃三本足が奨励された。一反に四円くらいの奨励金が出た。三本足（稲掛けの足ともいう）は竹または木を三本組んだものである。

〔稲抜き〕 千歯は麦千歯は竹であったのが九千歯に変わったが、稲は平千歯で既に鉄製の歯であった。昼は精一杯抜いで四〇把くらいであった。夜はシノヤ（収納屋）にランプをつけて抜いた。シノヤは二間四方で土間であった。一晚に一〇把抜くのは大変であった。一把が粃四升で、一俵は粃五斗であった。粃は筵に乾し、モミアセリでひろげた。稲の脱穀には稲打台は使わなかったが、小麦の時に使った。台の上に竹を張り、その上においた石に穂を打ちつけた。

〔糶摺り〕 松の木で作ったトウスを使っていたというが、使った経験はない。トクマイ（小作料）を納めていた人は使っていたようである。クルマ（水車小屋）に持って行って、カラウスで糶摺りし、トミーで調製した。

〔製粉〕 石臼で粉にする。一斗以下の時には、臼に入れて杵で搗く。フルイでふるって、荒いのはまた搗く。搗いた粉の方が団子にした時にやわい。焼米を作る時にカラウスを使ったこともある。

〔肥料〕 夏は毎朝五時頃、アサクサキリに駄二頭を連れて行き、ニンダ（二把）積んで、一〇時頃帰って来た。牛に踏ませて小屋に積む。アオクサゴエという。麦植の時に一反二〇〇貫くらいやる。稲作には麦の時に施肥の残りをやる程度である。

五 衣（男子）

〔頭〕 手拭で頬冠りする。竹皮のバチリンガサやランチクガサを冠った。ランチクガサは色が白く小型で、晴雨兼用した。烏打帽は冬の作業帽であった。他所行きには台湾帽やカンカン帽。

〔腕〕 手首までのクウカケを使う人もあった。

〔上体〕 夏は紺や縞の襦袢で、袖口はボタン止めかコハゼ止めであった。昔は白糸を買い、平川のコーヤ（紺屋）で、向き向きによって〇銭染めにしてもらい、松葉でモメンハエをして自家で織っていた。冬は袖口の狭い鉄炮袖や筒袖の綿入れを着た。雨の時はカヤミノやヘラミノを着た。カヤミノは売りに来ていた。カヤミノを買えない者がヘラミノを自家で作った。後に棕櫚皮製の棕櫚簀が入ってきたが、背中にヌカル（チクチクする）ので悪かった。

普段着は、夏は単衣のナガギや浴衣。冬はネルの襦袢に縞の袴。袖は鉄炮袖で、ワカイモンは筒袖である。厳寒期には綿入れで、ボタン止めの袖無しを着た。

〔下体〕 六尺禪。盆の贈物はテノゴイとコザルシ（晒木綿）が多く、コザルシを禪にした。夏は膝下までのサルモヒキ、

冬はモヽヒキ。

〔脚〕 冬は上が紐、下はコハゼのついた脚絆。

〔足〕 夏はアシナカ。冬は藁製のユキグツを履いた。足首までしかなく、アド（踵）は出ていたが、当時は寒いとは思わなかった。その後阿波足袋が入ってきた。底は帆木綿で、外で縫ってあった。ハダシタビともいった。徳島に注文して、一〇足五〇銭であった。地下足袋は大正九年頃入ってきた。一円五〇銭した。普段履きは草履・ウチワリ下駄。盆歳暮に贈られた竹皮草履は他所行きにした。草鞋は他所行きで、寒くなれば黒足袋を履いた。

六 食

〔主食〕 アサメシ、ヒヤメシ（昼食）・ユウメシという。サンゴクメシ（米、麦、粟）であったが、米と麦になった。ヒラカシムギ（丸麦）を前の晩に煮て洗う。ノリははえて牛にのませた。ヒラカシムギを鍋の底にしき、中に米を入れて炊く。篠竹でスをツイてでき加減をみた。メシを炊くのは朝、晩である。米、麦は半々であったが、小作人の家では麦を多く入れた。二石五斗の収穫であれば二石をネングに取られたので、米の保有が少なかった。

〔副食〕 朝は野菜を入れた味噌汁・煮メ・漬物・いりこ。昼は朝の残りの味噌汁・漬物。木爪・茄子を味噌でもんだもの。冬は百本漬（沢庵漬）や味噌漬。夜は漬物やダゴジル。米をのばすためにダゴジルが多かった。魚はブエンを食べることはなかった。肉をウチでは煮らせないようにした。牛は農民の宝だから食べてはいけないといった。

〔食器〕 各自の箱膳を使った。主人のはカヤク（胡椒の粉・しょうがなど）を入れる抽出がついていた。茶碗・汁椀・テシヨ・湯呑・箸を入れた。食器は夜一回洗うだけであった。

〔調味料〕 味噌・醤油は自家で製造した。麦麴二斗・大豆二斗に三合塩といって、麴一升につき塩三合の割で入れた。大豆をやわくなるまで煮て、杵で搗く。麴を入れて搗き混ぜ、塩を入れて桶に詰める。味噌倉でねせる。長くねせるほどよい。

醤油は麴と大豆の比率は味噌と同じであるが、麦も大豆も煎る。味噌は麦が多いほど、醤油は大豆が多いほど味がよかった。醤油を買うようになったのは戦後である。

〔間食〕 朝草切りに行く時にはチャノコといって、前の晩の冷飯を漬物で食べて出掛けた。田植・稲刈の時はコブリにダゴやおハギを作ったが、ヤトイドがなくて家族だけであればトイモでもふかす。

〔弁当〕 二軒以上離れたダイにホッサギリ(乾草切り)・根ざらい・大小豆の畑仕事に行く時には、タケマゲに朝・昼二食分を入れて携行した。副食は菜葉の漬物や味噌漬を竹筒に入れ、水は一升入りの竹筒に持って行った。

七 住

〔環境〕 川が真北に流れているので、南向きの家は川ぜきになるので避け、西向きに立てる。飲料・洗い物には川水を利用する。井戸は一戸しか持たない。屋敷林はない。

〔間取〕 田の字型にニワをつけている。ニワに隣接してゴゼン・ナイショ(ナカエ)があり、さらにザシキ・ナンドがある。六間になればナカノマ・ナカナンドが間に入る。大黒柱は樫が多く、ニワ・ナイショ・ゴゼンの接点にある。ザシキは客用で床の間・神棚・仏壇・オシコミがある。ナンドは主人夫婦や子供の寝室である。ゴゼンは老夫婦の寝室に使ったりする。ナイショに三尺角のイロリがある。イロリは石・粘土・藁で作る。ジゼーカギ・ゴトク・火箸が置いてある。イロリでは、暖をとって煮炊きをする。煮炊きは鉄鍋です。鉄のカンスでは酒の燗をする。イロリにはヒーケーギを絶やさないようにし、これを吹いて火をおこす。イロリは亥の子の日にあける。イロリの席はモトザ(ヨコザ)・ムコザ・キジリとよぶ。子供がイロリに小便などをした時は、その部分の灰をすくい、塩をまいて荒神様にわびをいう。荒神が障ると塩や線香をホコー。稲刈りの時に最初に刈った稲穂三本を荒神様にあげる。カケホという。春秋二回、日田の天台宗の坊さんが荒神・バライに来る。麦マワリ・米マワリという。木魚を叩いて般若経をあげる。盆にヒー(幣)が立つほどの米を盛って礼をする。一升三合三勺量れ

ばよいという。

ニワは一つにしきり、奥の方にはクドを作つて炊事用。前の方には鉈・鋸・臼・漬物・コーバン桶などを置いた。

〔床・天井・建具〕 床は竹を四つ割にしてならべ畳を敷く。竹は古くなって弱ると音がした。天井は篠竹や二つ割か丸の竹をならべる。二つ割にした時は皮の方を下にする。上に土を塗つてあればよい方であった。建具は板戸・マイラ戸・スキ戸であった。ゴゼンとザシキのオモテは障子。ナンドの奥は壁に明りどりのマドンコがある。

〔小屋・倉〕 小屋は三間に分かれ、牛馬・堆肥・収納屋に使つた。倉には農具・味噌・醤油・米・麦などを入れた。

〔屋根〕 屋根は茅・藁・杉皮・瓦などで葺く。茅葺は三〇年、藁葺はヒムキは八年北向きは三年しかもたない。杉皮は六〇年くらいもつとみかけがよいので、現在は杉皮葺が最も多い。二尺間隔に二尺のメグシの上に棕柎綱をはさむ。一尺五寸位の厚さに杉皮をおく。小さい竹のホコでおさえる。棕柎綱で締めて小さいホコをとる。同要領で棟の方の上つて行く。頂上は竹でムネマキをする。

八 基他

〔交易〕 塩・醤油・酒などを売る店はあつたが、砂糖・酢・油などは平川へ牛をひいて買いに行つた。油は菜種と交換した。買物の時には米などを牛にのせて行き、売つたりした。天ヶ瀬や日田にも行つた。祝言の時には森に魚買いに行つた。衣類・いりこ・小間物・菜などは行商が来た。塩は中津から馬にオーせてコモオーダツに入れて売りに来た。炭・カゴ（楮）・蘆の実などは日田から仲買が来た。カゴは山林伐採後三〜四年間杉の植林の間に植えた。日田までの駄賃取りが数名いた。

〔若連中〕 六〇年前に青年団と改称するまでは若連中といつた。祭の時の芝居の席づくり、ハナやランブの世話・喧嘩の取締りなどをした。田植後から寒くなるまではお宮に泊る。男女一緒に盆踊の練習をした。収穫後は、民家から離れた田にヨナベ小屋を作り、ワカインが集つて縄やアシナカを作つたり、雑談をした。雨降りには昼間から寄つた。冬は若者の居る広い

家や個人の倉の二階などを借りて、数名ずつ泊った。ウチのジョー（家ばかり）に居て蚤からくわれるようじや駄目だといって、親達は若者宿に行くことをすすめた。

年中行事と人生儀礼の婚姻までの話者は、天ヶ瀬町杉河内のカジワラヨネキチ（明治三三年生れ）・カワノキヨシ（明治二四年）・アナイカナエ（明治三二年）・カワノイサム（明治三五年）・セトクマオ（明治二七年）・カワノマサキ（明治三三年）・カジワラトミタ（明治三五年）の諸氏である。人生儀礼の葬送以後の話者は、玖珠町杉河内のウメキンゲル（明治三三年）・ウメキシヨウキチ（明治二七年）・ワタナベケイサク（明治二七年）・ワタナベトラジ（明治三五年）の諸氏である。炎暑にもかかわらず長時間に亘って御教示下さったことに厚く感謝致します。